

先人の足跡5

— 誠実と責任感 —

安達二十三中将

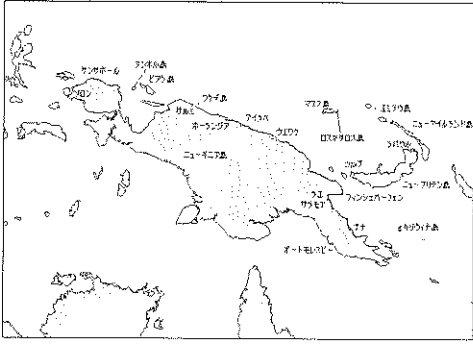
教育問題 P T

廣瀬 誠 陸自73

お孫さんやお子さんと一緒に読んでいたことがあって始めて、日本人の道徳を考える上で参考になると思われる軍人等の物語の連載も、すでに第5回を迎えることになりました。今回は、安達二十三中将の物語です。

安達中将は、昭和17年（1942年）11月、第18軍司令官としてニューギニアに赴任しました。上官は、第8方面軍司令官、今村均大将でした。ニューギニアは、わが国から南に約4千7百kmの距離にあり赤道に近く、日本の2

ニューギニア方面地図



出典：ウィキペディア

倍もの大きな島です。

当時、すでに日本軍の最前線となっており、米マッカーサー軍を阻止すべき第一線でした。このため、ニューギニアにおける日本陸軍の戦いは、壮絶なものとなりました。ニューギニアは最高峰が4千mを超えるオーエンスタンレー山脈と、人跡未踏のジャングルに覆われたマリアアの蔓延する地でした。米豪連絡線を遮断するための昭和17年8月に行われたポートモレスビー

攻略作戦から、昭和19年7月のアイタペ攻撃まで2年に亘る戦闘の後もゲリラ的な戦いを続けます。それは、制空権と制海権を失い、ジャングルに阻まれて、戦力を望むところに集めることが出来ず、そのため米軍の空と海からの上着陸作戦により各個に包囲されるような戦いが繰り返され、十分な食料と弾薬もない戦いでした。第8方面軍

が昭和18年2月にガダルカナル島放棄後、逐次に投入された兵力は、約14万に達し、昭和20年8月30日、降伏した時点の生存者はわずか1万3千名といわれます。11万名以上の将兵が戦死、餓死、そしてマラリアに倒れるという悲惨なものでした。

このような戦場で、安達中将は、マッカーサーの攻撃を引き付けることによりその進攻を遅らせて本土防衛に寄与するとの信念と、部下と辛苦をともにするという覚悟をもって、部隊

を統率しました。このような厳しい戦いの中で、安達軍司令官は、部下の部隊長との意見交換と奮闘する将兵の激励のため、高い山を越えて第一線まで駆け実情を自ら確認して、部隊長と作戦の理解についてとことん話し合う

とともに、疲れ果てた兵隊に会うと、いちいち立ち止まって「ああご苦労だね、どうかな、頑張ってくれ」と言葉かけたと伝えられています。作戦の結果については、一切の批判も、また、一人でも悔やむこともなく、全て自分の責とされたそうです。昭和20年（1945年）9月、豪軍に対して降伏調印後、他の戦犯容疑者とともにラバウル収容所に入れられます。帰還兵を乗せる船が入るたびに、帰還將兵に「長い間ご苦労だった、よく頑張ってくれた、有難う。帰ったらすぐ両親のところ、家族のところへ帰りたいだろが皆病人だ。我慢をしながら病院に入り、元気になってから帰ってくれ。そして私に替わって戦死者の慰霊、一緒に持ち帰ることのできない沢山のご遺骨の内地帰還、更に祖国の復興のためどうか頑張ってくれ、後を頼む」と、涙を流しながら話しかけておられたということだ。

戦争裁判では、部下戦犯のために証言台に立って弁明し、自らの責任であることを主張しました。そして、無期禁固の判決を受けます。

昭和22年（1947年）9月10日、中将は、最後の釈放帰還者を確認してから、日本の方角に向かい端坐し、小刀で割腹し、自分の手で頸動脈を圧迫するという、壮絶な自決をされました。

次に安達中将の遺書の一部を掲げます。あえて、原文を掲げますので、若い方も、是非、ご自分で読んでいただきたいと思えます。（頑張つて挑戦してみてください）

「今村大将閣下
上月中旬閣下

（中略）

小官は皇国興廢の関頭に立ちて皇國全般作戦寄与の爲には何物をも犠牲にして惜しまざるべきを常の道と信じ、打ち続く作戦に疲憊の極みに達せる將兵に対し更に人として堪え得る限度を遙かに超越せる克艱敢闘を要求致候。之に対し黙々之を遂行し力竭きて花吹雪の如く散り行く若き將兵を眺むる時君国の爲とは申しながら其の断腸の思いは唯神のみぞ知ると存候。当時小生の心中堅く誓ひし処は必ず之等若き將兵と運命を共にし南海の土となるべく縦令凱陣の場合と雖も渝らじと決心致し居り候。

又小生には左の二残務ありと存居候。

（中略）

一、復命
軍状奏上については両閣下に御願申上候。

（中略）

二、陣没、殉国将兵の遺族救護の件
この点に関しては、真に万斛の憂を懐きあり自ら渾身の努力を致すべき筋なるも能く果たし得ざるにつき何卒従前に引き続き宜敷く御願申上候。
右二件甚だ勝手乍ら切に御願申上候。

（後略）

安達中将について、二人の文筆家の感想を次に引きます。

「最高司令官であった安達中将の例は、人間の悲惨事を極限まで強いられ、この暗黒の戦場に射した一条の光のごときものである。」

（中略）

ニューギニアのような戦場では日本軍がいたっていたのが勇将であつても、知将であつても、どうしようもなかったであろう。このような武人が軍司令官であつたことに後世の日本人は一抹の慰めを覚えるのである」

（野呂邦暢『失われた兵士たち』）

「終戦直後の昂奮時ならともかく、二年を経て、おのれの責任を全うしたと見えわめてから自決したのはみごと

というべきである。・・・（後略）」

（山田風太郎『人間臨終図鑑』）

参謀として傍でともに過ごした堀江正夫氏は、次のように書いています。

「こういう厳しいニューギニアの戦場でしたが、色々な力がこれを支えてくれました。一番大きな力は、安達二十三軍司令官の存在です。」

（中略）

私は、猛将であると同時に聖将であると確信しています。今日まで接したたくさんの將軍の中で、これ程愛情に満ち、これ程素晴らしい將軍は見たことがありません。この將軍の力というものがあるニューギニア作戦を支えたのだと、私は今でも強く思っています」

北支方面軍で仕えた塚本政登士氏（陸上自衛隊元北部方面総監）は、その著書で次のように書いています。

「実は、このニューギニア戦の経過を書きつつ私はしばしば涙を禁ずることが出来なかつた。それは、戦略、戦術上の是非はともあれ、この第十八軍の猛闘が最後まで安達軍司令官の指揮官としての優れた人格と想像を絶する愛国心と敢闘精神の下に、統率の系統を乱すことなく行われたことについての感激である」

（『大東亜戦争における日本軍の戦略・戦術の反省』）

最後に、3人の子供たちに残された中将の遺書の一部を掲げます。中将のお人柄を垣間見ることが出来ると思います。

「・・・（中略）

自分は生来不敏不徳で家の名譽として皆に話す様な事蹟は何事もない。只軍人としての節義に就いて常に気をつけて来た。この一点に於（おい）ては子供を恥かしく思わせるようなことはないつもりである。皆に曾祖父幸子之助翁、祖父松太郎翁は清節を持して一生を終わつた人である。吾々の家に於て皆に残し得る財産ありとせば唯一つ清節を持すといふことばかりであろう。

それでは皆身体に気をつけて、又しつかりして今後の艱難（かんなん）な人生行路を三人手を組んで勇ましく清く明朗に進んで行き悔いなき一生を送ることを折る次第である」

安達中将の誠実で晴朗な人柄と優しい心情があふれています。

皆さんは、心を動かされませんか。安達中将の誠実さと、戦場におけるその不屈の精神と勇氣とが、一人の人格の中にあることに。真の勇氣は、誠実に自らの使命と信じる道を進むことか

ら自然と生まれるということに。

安達二十三中将略歴

明治23年（1890年）、石川県生まれ。名前の二十三は明治23年にちなむ。

中央幼年学校予科から、陸軍士官学校第22期卒業。陸軍大学校34期卒業。第37師団長、北支那方面軍参謀長、第18軍司令官。

安達二十三中将



出典：ウィキペディア

【参考文献】

- 堀江正夫「わが人生を顧みて」英霊にこたえる会たより 第55号
- 塚本政登士『大東亜戦争における日本軍の戦略・戦術の反省』九段社
- 額田 坦編『世紀の自決 日本帝国の終焉に散つた人々』芙蓉書房
- 野呂邦暢『失われた兵士たち』戦争文学試論 文春文藝ライブラリー
- 山田風太郎『人間臨終図鑑2』徳間書店
- 陸戦学会『近代戦争史概説』下巻